



知覺作用

文學士 松本孝次郎講演

吾々の智識の働きは感覺のみで終るとすれば吾々は外界の物体の智識を得ることは出来ない。然るに精神の性質として支離滅裂のものを統一して吾々の智識を作るのである。即ち日常外界の物体にあへば其の事々物々の姿を心に寫す而して其手段は何てあるかといふと色々の感覺器官を用ゐて寫す。故にこれは心といふ鏡を持って居て其上に色

々の物を寫すと同じことである。

斯様にして寫したものを知覺といふ。而してこの知覺をあらはす作用を知覺作用といふ。感覺作用では色を知るとか香を知るとか個々別々のものであるが知覺作用は感覺作用で知り得た所の色だの香だのを集めて一つの物体の形を作るのである。例へば今我々が巻烟草の姿を寫すにはまづ目で以て其形を見次に觸を見て其堅さを知つて其形を寫し出すのである。而して今皆さんは私を知覺して居るものである。私は今此席を去つても皆さんは私の姿を心に思ひ浮べることが出来る。この場合の私の姿は即ち觀念にある。故に知覺と觀念とは如何に異つて居るかといふに觀念の時には刺激物がなく知覺の時には刺激物が現存して居る。そうして知覺には現實的であると云ふ意識あれど

も觀念はそうでない。又觀念の時には鮮ならざれど知覺に於ては鮮に知る。又通常觀念に於ては精密でないが知覺に於ては精密に見とめる。されど現在では觀念といふ語を思想とか概念といふ所に用ゐて居ることもあるがこれは一つの言葉を應用したのである。我々の智識思想は觀念の多くなるに従つて豊富となる。而して觀念を作るには知覺が必要である。而して確なる知覺は十分なる感覺に由つて得らるゝものである。

### 知覺作用に付ての注意

常に適當に感覺器官を働かすことは其器官を鋭敏に且つ強壯にするために尤も必要である、これは恰も經濟上で適當に資本を用ゆれば財産を増すと同じ事である。そこで左に注意すべきことの二つを述べませう。

一、一時に成べく多くの者が知覺し得る様に練習すると。知覺が鋭敏になればなる程一つのものを知覺するに多くの時間を費さるに至る。即ち知覺の鋭敏な人が玩具店などを見ますと一目して同時に多くの物を知覺することが出来る。子供を教育するには同時に多くの物か知覺し得る様に教育しなければなりません。而してこれがためには其機會を與へることか必要である。米國にハフディンといふ手品師がありましてこの人は其息子の知覺作用を練習する爲に其子を多くの玩具を有する店の前に連れ行き自分と競争的に同時に多くの玩具を知覺することの練習をなした。而して同時に四十の玩具を知ることを得たりといふ。子供に遊嬉をなさしむる時に斯様な點に大に注意することは必要である。

二、一つの物に付て極精密に知覺する習慣を作ること。一の物体を知るに只其大体のみを知るにあらす。悉くの方面から出来る丈多くの感覺に訴へて種々の方面によつて知覺しなければならぬ。通常人は目丈にて知覺して以て足れりとなす。これは大人は已に經驗によつて目て見た丈で其堅さ等を知ることが出来る。しかし子供は大人の様を経験がありませぬ。決して大人視してはなりませぬ。故に同一物を出来る丈け長く經驗せしむることか必要である。これには或は興味を失ふかの恐あれど教師は度々發問して子供が未だ注意し得ざる點を指摘して知覺せしむれば興味を失ふことなし。特に動物植物鑛物等を觀察せしむる時に色々の方面から十分に觀察せしむることか必要である。右に述べた如く知覺作用を練習するには以上の二

ヶ條が必要である。而してこの習慣を作くる基礎は幼稚園の仕事である。故に平生注意して知覺作用を練習し得る様に習慣をつけざるべからず。これには實物教授が固より必要であるが専らこれに重きを置く必要はない。只教師は常に「學校の門の前には如何なる木かあるか」「學校に来る途中に於て如何なる店を見たるか」「學校に来るには幾何の時間を要するか」等の問を絶えず出して子供をしてこれに答へしむ。斯くの如くなす時は自然に知覺することの習慣を得るに至る。總て日本の子供には斯の如き習慣乏し。故に我々は蟬を持てる子供に向ひて其羽の數及足の數等を問ふも容易に答へ得す。子供の知覺の如何を檢するには彼等の見た物に付て畫かしめることが適當である。余の經驗によれば人、馬、時計などに付て畫かしめる

とか適當なり。即ち其畫きたるもの、精密の度によりて知覺の如何を知ることが出来る。しかし茲に注意すべきことがある畫をかくには記憶作用を要す。又筋肉運動の發達を要す。

(子供によりては時計の針を三四本畫くものありこれ其數を呈はすにあらすして其運動を示せるものなり。人の形を畫くにも其觀察の異なるに従つて各差あり例へば目を畫くに一〇〇等の變化あるが如し)

概して云へは多く實物を見て經驗する場合の多きに過ぐるものは精密なる觀念を持たず。斯様な人は上流社會の子弟に多い。何となればこれ等上流の子弟は多くのものを淺く經驗する故である。而して我々の誤りやすきことは子供が其内容を知らざる言語を知るを以て其言語に對する精確なる觀念を有するものなりと見なすことである。これは尤も注意すべきことである。子供は只言語丈知つ

て其内容を知らぬ者が多い。故に幼稚園では子供の知つて居る言語に付て其内容を知つて居るかどうかを檢査することが必要である。勿論永く度々斯様な方針を取るにも及ばぬされと或程度までは大切である。而してまた或る實物を示すときは知覺すべき點を指示して知覺せしむべきである。例へは一つの動物を示すにも只何處となく知覺せしむるのでなく目を見よ足を見よと指し示して知覺せしむる類である。斯様な知覺のしかたは只獨り子供に必要なのみでなく大人にも亦必要である。例へば人の顔を記憶するに先づ其特徴を知り次に他の點に及ぶか如き方法を取るときは早く記憶し得るが如きものである。又實物に付きてはまづ物質、色、形、大、位置、動靜、用方等に付て知覺すべきである。又茲に注意すべきは人は實物

に由りて確なる知覺を作り得るのみならず、實物を畫さしものを見て實物と同じく理解し得る様にせざるべからず。これ子供自身をして自ら經驗せしものを畫かしむると共に教師も亦實物を畫さたるものを示すべきである。幼稚園では其必要を認むること少さも地理の教授等には大切である。余り模型のみを重んじて教授する時は地圖などを利用することが出來ぬに至る。要するに知覺と圖畫とを連絡することは大に務むべきことである。

以上述べ來た様にして知覺すればする程觀念は多くなり智識は多くなる。而して其知覺が精密となればなる程智識は精密となる。

幼兒は自ら働いて知覺せんとするものである。こは其神經系統の勢力が發達をして余分にゐるに至れば初めて活動力が發するものである。即ち子

供が身体が病氣をして居る時に活動力の乏しいのを見て明である。そうして其勢力は疲れ易くあれども亦直に回復するものである。故に知覺作用をなさしむるに余り長時間にわたるは不可である。知覺する時間を短くして其後に少しの休を取ることが適當である。而して子供をして活動力を満足せしむることは子供に取つては非常の愉快である。

要するに知覺作用は早く發達するものなるを以て幼稚園時代及家庭時代に於ては系統を立て、知覺を發達せしむることが必要である。

ある女教師、兒童の算術問題を解き兼ねるを見て、もごかし相に『まーくなぞそんなに出來ないだらうねー。私なぞの子どもの時は、もつとすんく出來ましたよ』するさ兒童はねからず『そーでしよー 其代り先生も違つてたでしよー』